

1920年代中国における反キリスト教運動と 中国キリスト教会の本色化

朱 海 燕

はじめに

1920年代中国における反キリスト教運動（以下、反基運動と略す）の最中、教会「本色化（Indigenization, 土着化）」の提唱者の一人だった王治心（1881-1968年、運動当時南京金陵神学院の国語と中国哲学の教授）は、反基運動について「キリスト教に問題点を指摘してくれた貴重な友人」と肯定的な評価を下し、それは「少なくとも中国人キリスト教徒に自分の責任を認識させ、西洋人宣教師の中国教会の中での地位を変えた」⁽¹⁾と述べた。結果論的な見方とはいえ、教会の本色化に対する反基運動の影響をよく示す証言である。

これまで1920年代の教会の本色化運動について論じた研究は多岐にわたり、多くの成果をあげている。例えば、個別の教会についての呉義雄の研究、「中華基督教文社」や「生命社」などキリスト教言論機関を分析した王成勉、呉国安のもの、キリスト教指導者の本色思想に着目した呉利明、劉家峰のものがある。あるいは、本色化運動を中国キリスト教史に位置づけながら紹介した王治心や山本澄子、神学史に与えた影響を論じた林榮洪の研究も参考となる⁽²⁾。しかし、本色化運動において重要な主題であった「本色教会」論を、反基運動の影響という観点から、

系統的に整理し、分析したものは少ないように思われる。

1920年代の反基運動は五四新文化運動時に形成された反宗教思潮を思想的背景とする啓蒙運動であると同時に、1922年のワシントン会議での中国外交の失敗によるアメリカをはじめとする欧米諸国への深い失望と国民国家建設の熱望に支えられたナショナリズム運動で、時期を同じくして推進されていた中国キリスト教会の本色化運動に計りきれない影響を及ぼした。そこで、本稿は反基運動以前の中国教会の本色化の歩みに注目しながら、『文社月刊』などキリスト教系の新聞雑誌に発表された1920年代の中国キリスト教知識人たちの本色教会についての代表的な議論を中心に、当時の教会知識人たちが作ろうとした本色教会とはなにか、彼らはそれをどのように作ろうと考えていたのかについて再考察する。考察にあたってとりわけ1922年のプロテスタント全国大会での本色化の議論に注目したい。当該大会は中国教会の本色化運動の里程碑とも謂われ、それ以降の本色化論はこの大会での議論の枠組みを超えていない。しかし、従来の研究では詳しく取り上げられることがなかった。筆者は大会報告書の『基督教全国大会報告書』（1923年刊）をもとに当該大会の意義にも光を当てる。以上の作業を通して、より明確に本色教会像を描き出し、五四新文化運動と1920年代の反基運動の教会への影響を明らかにする。そして、激動の時代である1920年代に適應するために尽くしたキリスト教知識人たちの努力を見届けたい。

I 1920年代以前の中国教会の自立の歩み

1920年代にキリスト教知識人たちが度々言及した「本色化」という概念は、1920年代の産物であった。それまでは、「自治（自理，Self-governing）」、「自養（Self-supporting）」、「自伝（Self-extension）」—これらを略して「三自」という—を指す「自立」という用語が曖昧に

使われていた。これらの言葉は総じて、組織運営、経済経営の面における外国宣教会からの自立を意味していた。この三自の概念を提示したのはアメリカン・ボードの総幹事ルーファス・アンダーソン（Rufus Anderson, 1796-1880）であった。1840年代に彼は三自を基礎とする「ネイティブ教会（Native Church）」の建設を提唱した。時期を同じくしてアフリカにおける英国聖公会の宣教師ヘンリー・ヴェン（Henry Venn, 1796-1873）も同様の主張をし、三自の原則を普及させ、これを教会の土着化の進み具合を判断する基準とした。三自教会の宣教理論は1860年に開かれたリバプール宣教会議で多くの参加者の賛同を得て、超教派による教会統一（世界教会主義, Ecumenism）を話し合う1900年ニューヨーク世界宣教大会ではネイティブ教会自身の発展問題が注目を浴び、経済的自立を意味する自養の実現をネイティブ教会の基本原則にすることが共通認識となった。

ネイティブ教会の設立は中国に派遣された宣教師たちの間でも早くからその重要性が認識されていた。1877年に開かれた第1回プロテスタント宣教師会議で、寧波に派遣されたアメリカ長老会牧師ジョン・バトラー（John Butler, 不明）やアメリカメソジスト教会の宣教師ボールドウィン（S.L. Baldwin, 1835-1902）らは教会自養のスローガンを提出した。その後、1880年代にはアメリカ北長老会宣教師ネヴィウス（John Livingstone Nevius, 1829-1893）によって新しい伝道方法が発表されるなど、教会の土着化を実現することは外国人宣教師たちの共通目標となった。

中国教会の自立の動きは19世紀後期に現われた。1860年代に上海のバプティスト教会の信徒黄益山が自ら出資して建てた福音堂、1873年にバプティスト派の信徒陳夢南らが設立した「粵東広肇華人宣教堂」、1885年に登州文会館の卒業生鄒立文らが設立した「山東酬恩布道会」などがその例である。

しかし、教会自立の動きが活発になったのは20世紀に入ってからである。それは19世紀末に西洋世界で始まったエキュメニカル運動に促された側面も持つが、何よりも一連の「教案（反キリスト教事件）」の頂点をなす義和団事件に対する反省という側面が強かった。義和団事件は西洋宣教会と宣教師に中国での布教を見直す必要性を感じさせただけでなく、自覚ある中国人信徒にも自身の置かれた状況と教会の自立について考え直す機会となり、中国人信徒による自立教会を続出させた。こうした動きをさらに前進させたのが辛亥革命とそれ以降のナショナリズム運動であった。とりわけ、辛亥革命は中国教会の自立運動の一つの境目となり、この時期に多くの自立教会が出現した⁽³⁾。

この時期の教会の自立化はその推進主体が外国宣教会か中国人信徒かによって2種類に分けることができる。そのうち、中国人信徒による教会の自立化はさらに、個々の教会が独立し、従来の欧米の教派団体とは無関係にそれぞれ独自の構想をもって伝道するタイプ（個別型）と、中国のプロテスタント全体を大きな一つの教会と考えてその自主独立を図るタイプ（合同型）、の二つのタイプに分けることができる⁽⁴⁾。以下において、その代表的な教会を簡単に紹介する。

(1) 外国宣教会による中国教会の自立化：閩南長老会

閩南長老会の自立、自養の動きは19世紀後半に始まった。その主体は外国人宣教師であり、1862年に福建省のアメリカ改宗教会（The Reformed Church of America Mission）とイギリス長老教会（English Presbyterian Mission）は、共に自立自養することを図り、それぞれの母教会に自治を申請した。その要求は許可され、二つの教派は合同して「中華自立長老会」となり、泉州、漳州を中心に長老会閩南泉漳長老中会を作った。その管轄下にあった堂会（小会）2カ所は外国の母教会の関与なしに自分らの意思で牧師を招くことができた。1893年には

長老会閩南総会を正式に成立させた。しかし、閩南長老会が実現した自治、自養はきわめて限られたものだった。教会牧師の招聘権を手に入れたものの、自養はわずかに牧師の給料を賄うだけにとどまり、その他の堂丁（職員）や伝道員の給料、学校の経費などの費用はすべて外国宣教会の補助に頼らざるを得なかった。その後閩南長老会（総会）は迅速に発展し、1913年には二つの区会（中会）、40カ所の堂会、信徒40334人を持つ大規模な教会になり⁽⁵⁾、1920年にはロンドン伝道会（The London Missionary Society）と正式に合同し、「閩南合一会」を成立させた⁽⁶⁾。この閩南合一会は1922年に当時成立準備中であった超教派教会「中華基督教会（The Church of Christ in China）」（正式な成立は1927年）に合流した。

この閩南長老会から、外国人宣教師たちが理想とした自立教会のモデルを窺うことができる。つまり、まず在中国の教会が外国母教会から自立し、それから強くなった中国の教会から外国人宣教師が身を引くことである。しかし、1910年代までで閩南長老会が獲得したのは外国母教会からの自立（自治）であり、外国人宣教師からの自立ではなかった。教会は「依然として宣教師の『家長制』の影響下で運営されていた」⁽⁷⁾のである。外国人宣教師が大きな権限を持っていることを克服することはこの種の教会の自立に立ちふさがった難問であった。

(2) 中国人信徒による教会の自立化1：中国耶蘇教自立会（個別型）

中国耶蘇教自立会の設立は1902年に発足された中国基督教徒会まで遡ることができる。1902年、上海の高鳳池、宋耀如、兪国楨（宗周）ら13人は「教案の烈しさを憂い、外患の日に切迫せることを悲しんで」「中国基督教徒会」を発足させ、新聞『基督教徒報』を創刊して西洋人教会との経済関係から完全に離脱して自主的に団体を作り、不平等宣教科条約を打ち消すことを訴えた⁽⁸⁾。1904年に兪国楨がこの会の会正（会長）

になり、1906年に彼は同じく布教権の回収を重視する同志たちと上海で新たに「中国耶蘇教自立会」を作った⁽⁹⁾。しかし、この動きは外国人宣教師から非難され、教会の実力を弱める挙動だと批判された。その結果、中国基督教徒会と中国耶蘇教自立会の会員は、完全には外国宣教団体との関係を断つことができず、なお所属していた教会の教籍を保留せざるを得なかった。しかし、辛亥革命後の1911年この二つの組織は分離独立し、中国耶蘇教自立会は完全に外国宣教会を離れた。

中国耶蘇教自立会が設立されてから、浙江省の鎮海、定海、永嘉や福建省の莆田、広東、湖北、湖南などでも自立会教会が現れ、1910年に上海で総会が設立された。1911年には月刊誌『聖報』を創刊し、学校、病院などの福祉事業も行うようになった。1920年には上海で第1回全国大会が開かれ、この大会に80カ所余りの自立会教会と1万人を超える信徒を代表して130人の代表が出席した。その後、自立会教会の数は増え続け1924年には330カ所の2万人余りの信徒を有するようになった⁽¹⁰⁾。これらの教会は自立会と自称したものの、その中には自養も実現できなかった教会も一部あったようで、日中戦争勃発後には外国宣教会の援助を再び受け始める教会も少なからず出たという⁽¹¹⁾。

(3) 中国人信徒による教会の自立化2：天津、北京の基督教自立会（合同型）

天津の教会自立の動きは19世紀末から始まっていたが、1907年まで成果を实らせることができなかった。1908年にロンドン会の張芝庭が、他の教派の信徒と連合して公禱会を組織し、その後「自立会福音堂」を建てた。1910年に公理会（アメリカンボード）の張伯苓（南開中学校長、1909年に入信）らはこれを拡大し、5つの教派の7カ所の100人余りの中国人信徒を集めて会議を開き、中華自立教会を成立させる準備を進めた。そして1911年に正式に成立し、教会名を「中華基督教会」に改め

た。メソジスト派の劉善庭牧師が初代牧師だった。1915年の会員数は、大人が214人で児童が31人、信徒の主な職業は学者、学生、商人および官員で、都市中間層が中心であった⁽¹²⁾。

北京の自立教会は天津の教会自立の影響を受けて出現したもので、中心的な指導者は誠静怡であった。誠は民国期に最も影響力のあった中国人キリスト教指導者の一人である。1908年から北京のロンドン会米市胡同の伝道を担当していた彼は、1910年に按手を受けて牧師となり、1911年には勤めていた教会（東城堂）の経済的独立を実現した。1912年にはロンドン会を離脱し、北京、天津の中国教会のリーダーたちの支援の下で教会規則を頒布し、正式に「北京中華基督教自立会」を設立した。この自立会の理事会は15人の中国人代表からなっているが、彼らは北京にあるほとんどの教会を代表していた。誠は外国宣教会に対して、自立は排外や外国宣教会と友情関係を切ることではないと繰り返し説明し、入会会員にもとの教籍を保持することを奨励した。彼の自立の目標は、教派や国籍を超えた、合同した教会を作ることであった。この自立会は設立後、ロンドン伝道会や公理会などの外国宣教会からの支援を得ながら順調に発展し、1920年には570人以上の会員を有する教会に成長、教会の教務以外にも家庭布教、学校の設立などの事業にも携わるようになった⁽¹³⁾。

このように、1910年代の中国教会の自立は大きな進展を見せたが、その成果は三自の理想とはまだ程遠かった。趙天恩はその要因として次の3点を挙げている⁽¹⁴⁾。それは、第一に、自立の目的は外国宣教会から離れて自立した教会を設立し管理することであったが、参考にできるモデルが外国宣教会から見習ったモデルしかなく、西洋モデルの枠組みを乗り越えることができなかったこと。第二に、多くの宣教師は教会の支配権を失うことを恐れて中国で自立教会が立ち上がることを厳重に防いでいたこと。第三に、民国初年の政治および文化的雰囲気キリスト

教に対して友好的であったために、信仰の本色化の必要性を実感させなかったことである。そのうち、筆者が最も同意できる説明は第三である。この友好的だった状況を一変させたのが、1915年にスタートした新文化運動とそれを思想的ベースにする1920年代の反基運動である。

Ⅱ 1922年のプロテスタント全国大会と教会「本色」論の提出

袁世凱による帝政復活が現実味を増していた1915年、中国では「賽先生」(サイエンス)と「徳先生」(デモクラシー)を旗印に、旧道徳・旧文化を打破し、人道的で進歩的な新文化を打ち立てることを目的とする新文化運動が起こった。1919年の五四運動はこの新文化運動の最高潮であった。この新文化運動は中国の教会に思わぬダメージを与えた。『新青年』を陣営とする新知識人の間で、儒教批判が広がり、それが徐々にキリスト教への否定をも含む広範な反宗教思潮をなしていった⁽¹⁵⁾。この反宗教の思潮の中で、1922年には世界キリスト教学生同盟会議の北京での開催に反対する広範な学生運動である非キリスト教運動(以下、非基運動と略す)が勃発した。これによって前後6年も続くことになる1920年代の反基運動が幕を開けた。この非基運動においてキリスト教とYMCAは、科学や人道主義、理性に違反するものとして、資本主義国家の経済侵略の前衛部隊として厳しく批判された。

こうした中、「中華続行委辦会 (China Continuation Committee)」の主催の下、1922年5月2日から11日にかけて第5回プロテスタント全国大会が上海で開かれた。この大会は1910年の世界宣教エディンバラ会議の精神に従って、過渡的な中華続行委辦会に代って、全国のプロテスタント教会を代表できる正式機関「全国基督教協進会 (National Christian Council of China)」を組織し、中国における各宣教会と宣教機構間の相互協力と連携を深めることを目的としたものであったが、

中国の社会思潮の劇的な変化（新文化運動など）に対する教会側の対応という側面をも合わせて持っていた。大会の中心テーマは「中国教会」で、委辦会の中国人幹事誠静怡が大会長を務めた。1025人の中外代表が大会に参加し、そのうち中国人が568人を数え、この大会ではじめて代表者の半数を超えた⁽¹⁶⁾。

最初にこの大会で教会の本色化を訴えたのは誠静怡であった。早くから自立運動に参加した彼は、開会演説で中国の教会にとって自立は最も差し迫った問題になっていると指摘しながら、経済だけでなく思想制度と方法までも外国教会に頼っていることを批判した⁽¹⁷⁾。その上で彼は、教会の本色化の必要性について次のように述べた。

キリスト教は東方の宗教であるが、しかしそれは欧米から中国に輸入されたものである。そのため、それはどうしても、かなりはっきりした西方の色彩を帯びざるをえなかった。これは必ずしも悪いことではない。なぜなら西方にはたくさんの優れたところがあって、私たちを助けることができるからである。しかしながら、中国のこのまさに盛んになりつつあるキリスト教会は、大いに留意し、正確な判別力を持たなくてはならない。そうしてはじめて一方でキリスト教の重要な精神をしっかりと把握することができ、他方で自国の民族精神を自由に、適切に表現できるようになるのである。ただ他人の言うこと為すことに盲従して、外国の風俗と遺伝、形式、制度、方法を丸ごと受け入れるのは、決して良いことだとはいえない。つまり、彼らの宗教上の真理についての解釈を受け入れてその根源を探らないことや、また彼らの思想によりかかってそれを都合よく勝手に応用するのも、良いことだとはいえない。現在の中国の人は、依然としてキリスト教を外国の宗教だと見做していますが、実にこれが大きな阻害なのです。この阻害は捨てなければならないものです。それだけでなく、この普くひろまり、各地方と各時代に適応できたキリスト教も、中国の本色化を受け

入れなければなりません⁽¹⁸⁾。

そして本色化の問題において、必ず中国の民族の立場から問題解決を試みることを主張し、本色化の実施程度をもって外国宣教会の事業の成否を判断する際の基準とすることを提案した⁽¹⁹⁾。

外国宣教会との関係については外国宣教会に積極的な協力を求める一方、当時、布教活動をめぐり外国人宣教師と中国人伝道者の間でしばしば摩擦が起きていたことに言及し、外国宣教会と中国教会を調和させるのに大事なものは責任者の人格であるとした上で、中国における任務を中国人信徒に引き渡し、外国人宣教師は「助手」の位置に退くことを希望した。また中国人信徒には、義務と責任をもって教会の建設に積極的に取り組むことを要求した⁽²⁰⁾。

要するに、誠は辛亥革命以後の中国の情勢と新知識人たちによって反キリスト教言論が盛んになされる雰囲気の中で、西洋の色彩を帯びているキリスト教を批判的に受け入れることを通してキリスト教の精神を正確に把握し、それを中国人の固有の精神に合わせて適切に表現すること、「外国教」と見なされているキリスト教を本色化・「中国化（組織面で中国人が責任を負って管理すること）」させて中国社会に適応した教会を作ることを主張し、その実現において教会を主体とした中外合作を呼びかけたのである。

誠に続いて、「今日の教会」をテーマとした第1グループの報告書は、今日の中国におけるキリスト教運動がもつ強みと弱みについて論じ、外国宣教会がもつ弱点を以下のように指摘した。①宣教師たちは相互に、教派の違いからくる偏見、教派による差別、些細な原因による妬みもっている。②西洋式の建築や礼儀の気質・礼拝儀式などが中国の教会には適していない。例えば、宣教会が定めた家屋や教会堂のデザインは、説教をする場としては十分だが、中国の寺廟のような宗教的尊厳を示すこ

とはできていない。③宣教会と宣教師は中国人信徒に相談せず独断専行する傾向とその弊害がある⁽²¹⁾。

「明日の教会」をテーマに教会の将来の仕事をまとめた第2グループも、中国本色のキリスト教を発展させることを今後の仕事の一つに設定し、それを促進させるための六つの意見を提出した。その大要をまとめると次のようになる。第一に、教会と宣教会はその方針と組織の目標を中国本色の教会を発展させることに置くべきである。第二に、宣教会と教会に関する問題は、中国人職員と外国人職員が討論して共同で解決すべきである。第三に、外国人宣教師はその地の教会の政策機関の支配を受けなければならない。第四に、外国人宣教師の数、資格、駐屯地、仕事などについては中国人宣教師と相談して決定すべきである。第五に、宣教と国民学校（ミッションスクール系の初等学校）を管理する責任は、徐々に中国人職員に負わせるべきである。第六に、教会の代表は教育とその他のキリスト教の社会事業に参加し、それを管理すべきである⁽²²⁾。これらの意見は「中国教会を主体とし、外国人職員と宣教会はそれに付き従う」というこのグループの趣旨をよく示した内容であった。その他、当該グループは中国教会の自立についても言及し、経済的自立は中国の本色キリスト教の表れであり、中国のキリスト教徒に金銭の管理を認め、外国からの寄付はあくまで本地の寄付の不足を補填するものと見做すべきであると提言した⁽²³⁾。

大会で最も系統的に中国教会の本色化を主張したのは第三グループであった。「教会の宣言」をテーマとした当該グループは、五つのグループの中で唯一メンバー全員が中国人からなっているグループだった。グループ長は誠静怡で、主なメンバーに梅華銓夫人（YWCA協会長）、范玉榮女士（YWCA全国協会幹事）、劉廷芳（燕京大学神学科長）、全紹武（中華婦主運動の幹事）、張欽士（北京YMCA幹事）、江長川（蘇州監理会牧師）、趙紫宸（東呉大学教授）などがいた⁽²⁴⁾。第三グループ

の主張は「教会の宣言」と題する9項目からなる宣言に集約されている。紙幅の関係で原文の引用は割愛するが、その内容は次の6点にまとめることができよう。第一に、教会の中国のキリスト教徒に対する霊育は、中国人の民族的特性と経験に適合すべきである。第二に、キリスト教の中で西洋から伝わってきた儀式、組織などについては、批判的に受け入れること。第三に、中国本色のキリスト教会は、世界のキリスト教の一部でありながら、中国の民族の文化と精神の経験に適合したものでなければならない。第四に、その具体的な内容は、中国教会の自治、自養、自伝を実現することと、外国人宣教師がつくった教会の礼節と儀式、組織、系統、布教の方法などを中国の事情に合わせて策定することである。第五に、その過程において西洋人宣教師は十分な指導と自由を中国人信徒に与えるべきである。第六に、その趣旨は西洋の宣教会に報恩し、世界のキリスト教会の生活を豊かにすることである⁽²⁵⁾。このように、宣言文は誠をはじめとする中国人キリスト教指導者たちの中国本色の教会に対する願望を集中的に表現したものになっていた。

外国人宣教師の中からも中国教会の本色化を支持する声があった。元宣教師で燕京大学教授エヴァンス (R.K. Evans, ロンドン会イギリス人宣教師、中国名は易文思) は、講演の中で外国宣教会と外国人宣教師が中国教会の主導権を握っている現状を批判した。彼の意見は四つあった。第一は、教会の管理において、外国宣教会は中国教会が与えた地位に留まり、中国教会と外国教会の暫時的な「中間人」(仲介人)となるべきである。第二は、外国人宣教師は中国の教会の会員となり、自分を霊的にも教会の管理においても中国信徒と同等の地位にある中国教会の信徒と見做すべきである。第三は、西洋人が寄付したすべての経費と資産は、中国と西洋の信徒が共同に管理すべきであり、学校などの慈善事業においても徐々に中国教会が参入する権利を増加させるべきである。第四は、教会事業の命脈が外国人宣教師の手に握られていることと西洋

の教派は、中国教会にとっては害である⁽²⁶⁾。そこで、エヴァンスは大きくなった姫を実家の王家に送り出す乳母のように、外国宣教会と外国人宣教師に思い切って中国教会の管理権を成長した中国教会に返すことを主張した。

このように、1922年のプロテスタント全国大会は中国教会の本色化運動の里程碑ともいえるべき重要な会議であった。大会では中国教会の本色化が正式に提出され、それは多くの教会指導者たちの共鳴を得た。そして大会の本色化についての要求（三自とキリスト教と中国の文化・精神との融合）はその後の本色化運動の推進に一定な方向性を提示した。しかし、残念なことに大会はさらなる具体案を成立させることはなかった。それは大会の中心課題が全国基督教協進会の設立にあったことにもよるが、何よりも本色化の問題が神学的立場による意見の違いなどを含めかなり難しく複雑であったからである。また、この時期の非基運動がすぐに鎮静化して大きな脅威とならず、まだ切迫感を感じなかったこともその一因といえよう。これが緊要課題として中国教会の前に横たわるのは1924年反基運動の再燃後である。

Ⅲ 「本色教会」についての本格的な討論(1924年-1927年)

中国国内のナショナリズムの運動が深化するにつれて、一旦下火になった反基運動は新たな段階に突入した。1924年ミッションスクールの教育権を回収する運動が始まると反基運動は再燃し、1922年の非基運動時の批判に加え、キリスト教学校教育が外国の中国に対する「文化侵略」として、国民教育の施しを妨げる障害物として反対され、ミッションスクールの中国政府への登録とキリスト教学校教育の世俗化を要求された。1920年代のナショナリズムの高潮である1925年の5・30事件の発生はキリスト教会とその教育事業への批判と反対をさらに激化させ、

国民革命（北伐）が始まると教会事業への直接的な破壊運動も見られるようになった。この民族主義のうねりを受けて愛国の態度を表明する信徒や外国宣教会と関係を絶つ中国教会が相次いで出現した。中国教会は義和団事件以来の最大の危機に直面したのである。

こうした状況の中で、神学的にリベラルな中国人キリスト教知識人は、民族的感情に煽られて、またこの危機を乗り越える対策として積極的に本色教会の建設について議論するようになり、『青年進歩』（上海、YMCA）、『真理週報』（北京、真理社）、『生命月刊』（北京、証道団・生命社）、『文社月刊』（蘇州、中華基督教文社）、生命社と真理社が合併して出した隔週刊『真理与生命』（北京、生命社）、『真光雑誌』（広州のちに上海、真光雑誌社）などの刊行物が言論拠点となった。以下では、本色教会に関する代表的な言論を中心に、その定義と実現方法について考察してみよう。

1 「本色教会」の定義をめぐって

(1) 趙紫宸（1924年10月）。「本色の教会はキリスト教と中国の古い文化が孕み含んだ一切の真理を合わせて一つにしなければならず、中国キリスト教徒の宗教生活と経験を国土・国風に合わせなければならない。…本色の教会は、経済の面において完全に中国人によって余裕のあるところから補うようにして賄うべきであり、管理の面においても完全に中国人により切り盛りするべきであり、組織の面においても完全に中国人の天賦に適用しなければならず、神学の面において完全に中国思想が自由に肥えて潤わせるに任せるべきである」⁽²⁷⁾。

(2) 王治心（1925年1月）。「本色教会とは、西洋化した教会を成功的に中国の民族性に適合した中国教会に改造することである。このような改造は、決してキリスト教の真理を動揺させることなく、中国の

古い文化とキリスト教の真理を融合させ一つにし、中国キリスト教徒の宗教生活をして、中国の民情に適合させ、(両者の間に)何らの齟齬が生じないようにすることにすぎない」⁽²⁸⁾。

(3) 誠静怡(1925年10月)。「吾々が提唱する本色教会は、少なくとも以下の二つの意味を含む。(一)キリスト教をして、如何に東洋において東洋人の需要に適合させるか、キリスト教事業をして、如何に東洋の習俗・環境・歴史・思想、人の心に深く入り込み破ることができなくなっている数千年にかかって結晶した文化と融合させるか。(二)教会の一切の事業は、中国信徒が責任を負うようにするべきある。百年来、キリスト教の中国における活動は、みな西洋人宣教師が担ってきた。経済であれ、管理(治事)であれ、思想であれ、おおむね西洋の友にひたすら服従した、それで中国の偏り枯れた教会を育成してしまった」⁽²⁹⁾。

(4) 周風(1925年10月)。「本色教会の目的は二層に分けることができる。消極的な面においては、教会の中の西洋的な色彩を取り除いて、外部からの猜疑をなくすことである。積極的な面においては、教会の内容を改良して中国の民族の精神と文化に適合させ、中国民衆をしていっそうキリスト教の門に入り易いようにさせることである」⁽³⁰⁾。

(5) 劉樹徳(1925年11月)。「本色の教会とは、すなわちキリスト教会を中国の国族(民族)、民性、文化、習慣にしたがって純粹化して中国化した教会に変えることをいう。現在の教会は、全て欧米化されたものである。教徒は中国人であっても、しかし彼らの性質、施設、伝授、儀式等々は、どうしても多少の異国風を帯びてしまっている」⁽³¹⁾。

以上の本色教会に対する定義から、当時の中国キリスト教知識人たちが考えていた本色教会の具体像を把握できよう。つまり、文化の面における中国固有の文化との適合、精神の面における中国人の精神的な経験への適合、経済の面における中国信徒による自養、組織の面における中国化などが、本色教会の主な内容でその要件となっている。それは従

来の三自の願望に加え、キリスト教の中国文化・思想との融合、中華民族への適応を呼びかけるものであった。

2 「本色教会」をどのように実現するか。

では、どのように中国の民族精神と古い文化に適合した中国本色の教会をつくるか。上述した本色教会に対する定義からも窺えるように、それは本来の原初的なキリスト教的真理の姿にすること＝西洋的な色彩の除去を意図する「純粹化」と、中国化または本色化の二つの作業をとまなう⁽³²⁾。この理論を次のように図式化できよう。

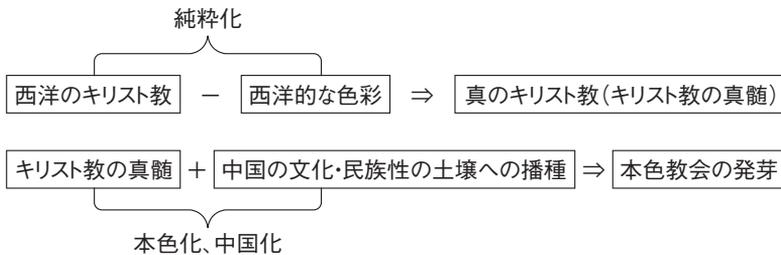


図1 教会本色化の理論

では、本色教会の建設に関してどのような具体案が提議されたか、その主なるものを見てみよう。なお外国宣教団体や外国人宣教師に対する要求については、前のプロテスタント全国大会に関する記述で詳しく述べてあるので、ここでは省く。

(1) 「西洋的な色彩」の除去

「西洋的な色彩(あるいは外国的な色彩)」を除去しようとするならば、まずどういうものが西洋的色彩であるか、限定作業が必要である。

当時、中国人キリスト教徒であれ、外国人宣教師であれ、みなが公認していた西洋的弊害は、西洋キリスト教会の教派主義であった。最初に教派主義を批判したのは誠静怡であった。1910年に中国代表としてエディンバラ大会で講演をしたとき、彼は中国教会の重要性を強調し、外国宣教会が中国にもたらした教派と教派主義を批判した。その後も彼は、教派主義は西洋教会の歴史的な産物であり、中国人自身の宗教的経験から生み出したものではないとして断固反対した⁽³³⁾。

趙紫宸からみれば、教派だけではなく、各公会（教派的起源を同じくする教会の連合）も西洋教会の負の遺産で反対すべき対象であった⁽³⁴⁾。また、彼はこの時期に進化論の観点に基づき、研究するに堪えない（科学的根拠のない）西洋の古い伝説—たとえば、処女懐胎、イエスの奇跡、イエスの復活など—とは関係を絶つべきだと考えていた⁽³⁵⁾。

この他、「国家主義的色彩」も取り除くべき西洋的色彩として挙げられた。この主張の代表的人物は周風であった⁽³⁶⁾。周は非基運動が大きな反響を生んだ原因を教会が帯びている国家主義的な色彩に求めた。教会が国家主義的な色彩に満ちているがために、中国民衆は教会に疑いや恐れを抱くようになり、疑いや恐れはまたキリスト教に反抗・攻撃する考えを生み出してしまい、そうした考えが広がって反キリスト教的な運動になっていく。だから、「国家主義的な色彩こそ『西洋的な色彩』の中で最大で最も有害な部分である」のだという⁽³⁷⁾。

このような考えに基づいて周は、教会において急いで取り除かなければならない国家主義的な色彩を、①外国の名称を用いていること、②外国の国旗を掲げていること、③領事裁判権を受けいれていること、④財産がそれぞれの外国の所有になっていることの4種類にまとめ、現在の本色教会は、①各教会機関に（所在国以外の）外国の国名をすべて取り消さるべきである、②各教会機関に（所在国の国旗以外の）外国国旗を一切使わせないようにするべきである、また外国国旗をもって護符

としてはならない、③領事裁判権の問題を解決する前に、領事裁判権および如何なる外国の保護も受け入れないと声明すべきである、④教会に、寄付する人の国籍に関係なく教会の財産は神の所有で全世界の教会の共同のものであることを公認させるべきである、この四つのことを責任もって行わねばならないと強調した⁽³⁸⁾。

周のこれらの主張は、当時再開されていた反基運動の反対言論を強く意識し、教会のもつ目立った外国的な色彩を取り除いて中国民衆のキリスト教に対する反感を解消しようとしたものであった。

このように、新文化運動の理性主義や反基運動の影響を受けて、処女懐胎など聖書の中の非科学的な部分や国家主義的色彩も排除すべきものとして挙げられた。これにより西洋的色彩の選別基準が守られるべきキリスト教の真理よりも外部環境に大きく左右されていたことが分かる。

(2) 教会の内容の改造

外国人宣教師によって定められた教会の内容を中国の文化・精神などにしたがって中国の民衆が受け入れやすいものに変えることは、キリスト教会の中国への適応の表れであり、キリスト教と中国文化との融和の一つのプロセスといえよう。

当時、誠静怡、趙紫宸、王治心、周風など進歩的な考えをもった教会知識人はみな中国人に受け入れにくい教会の内容を変えることを主張した。その改造が勧められた教会の内容というのは、教会組織、礼節、節句、建築、事業、礼拝の仕方と秩序、牧師の教育と職務、音楽、讚美詩、美術などで、その範囲は教会内容のすべてに及んでいた。たとえば王治心は、「本色教会応創何種節期適合中国固有的風俗」（本色教会はどのような節句をつくって中国固有の風習に適合させるべきか）という文章を書き、中国人によって普通に守られている節句——元旦、上元、清明節、

端午節、中元節、中秋節、重陽節などの意味に照らしながら新たにキリスト教的な意味を賦予して年節、灯節、掃墓節、潔淨節、追遠節、孝親節、感恩節の七つの節句を設け、教会によって既に守られている復活節、国慶節、聖誕節の三つの節句を合わせて、本色教会の守るべき節句にするのはいかがか、と提案した⁽³⁹⁾。また、彼は中国人の結婚と葬式に関する礼節についても研究を行い、本色教会は中国式とキリスト教式を折衷した婚礼と葬式にすることを提言した⁽⁴⁰⁾。

誠静怡は、本色教会の建設において研究と実験の二つの方法が重要であり、実験が研究よりさらに緊要であると指摘した。彼はその例としてある教会の建設計画中である教会堂を紹介した。その教会は神を礼拝するためではなく、牧師の礼拝説教を聞くために教会堂に行き、また牧師の話術の優劣をもって教会を評価する信徒たちの欠点を正すために、礼拝と牧師の説教を分離させた2階建ての教会堂の建設を計画した。つまり、2階を礼拝用とし、礼拝時には席を設けず、恭しく起立させ、賛美歌や祈祷、聖書を読むだけにする。そして1階は礼拝終了後に牧師の説教を聞いたり題を設けて公開討論を行ったりする場にする。誠はこうした建設計画を称え、これこそ本色の一表現であると高く評価した⁽⁴¹⁾。彼はまた東方の親孝行の思想を汲んで伝道師に親を扶養するための手当を出していた中国人信徒が設立した宣教機関や、中国人の祖先を崇敬する伝統を尊重して時期を決めて信徒全員で墓地に赴き記念礼拝を行うことなどについても本色の表れであると高く評価し、このような中国伝統文化とキリスト教を調和する研究や実験を奨励した⁽⁴²⁾。

(3) 「本色人材」の育成と「本色著作」の創作

① 「本色人材」の育成

本色教会を建設するためには、本色の人材または指導者を育成しなければならない。これは中国人キリスト教指導者たちみなが公認する方

法である。既に前述のプロテスタント全国大会で、趙紫宸は教会と教会学校の学生たちとの隔たりを中国教会の一大弱点であると指摘し、全国を征服してキリストに帰させるにはぜひとも有力な指導者が必要である、と教会学校の学生を指導者として育てる必要性を訴えた⁽⁴³⁾。その後、本色教会に関する本格的な討論がはじまると、中国教会の指導者像はさらに具体化される。王治心は、趙紫宸の「教会はかつて中国の人材、すなわち、本国の文化を十分尊重しながら、祖国の精神遺産の特質を十分理解している（人材）を訓練したことがない。教会はもはや中国人を半性（半分外国人の性格をもっている）の外国人に変えてしまった」⁽⁴⁴⁾、という嘆きに同感を示し、西洋学に長けた西洋化した指導者ではなく、中国の文化・精神遺産の特質を十分尊重し理解した本色指導者を育成すべきだと、指導者養成機関の改良を呼びかけた⁽⁴⁵⁾。これに加えて劉樹徳は、本色教会に対して何よりも重要な人材は、心の中から誠心誠意本色教会を愛する、責任感があり教会のためにわが身を捨てる精神を持った人であるべきだと、その精神面を強調した⁽⁴⁶⁾。

②「本色著作」の創作

この主張の熱唱者は清末の生員で国学の造詣に深い王治心であった。彼は「本色教会と本色著作」という文章の中で、ここ50年来のキリスト教の出版事業が中国に及ぼした影響を肯定しつつ、キリスト教系の出版物は創作的なものは少なく、その9割以上が外国人宣教師が観察し材料の選択を担当した紹介文的な性質のものばかりであったという。そこで彼は宣教師による観察の正確さと材料選別の適切さを疑問視し、観察と材料選別は中国人自身に担当させるべきだと主張した。そして本色著作は本色の中国人が適任者と述べつつ、「本色著作」の基準として三つの条件を設けた。つまり第一に、中国思想の中に溶け込みそこから生み出されたものでなければならない。第二に、中国文化の畑で芽生えて成長したものでなければならない。第三に、中国倫理化した洗礼を受けた

ものでなければならない。この基準に基づいて、彼は本色著者たるものは、一般的な中国の学問（「国学」）を知るだけでなく、キリスト教の精神についても詳しくあるべきで、そのほか、外国語の学力が必須だという。これらの条件の中で、彼はとりわけ国学の教養を強調し、梁啓超と胡適が提案した国学入門書リストをベースに、教会学校の学生を対象とした「国学入門書目表」までも作成した⁽⁴⁷⁾。

王治心のこの本色著作に関する言論は、実は中国キリスト教出版事業の中国化を求める声ともいえよう。そして彼の国学教育の重視は、本色化への強調だけではなく、当時の、教会学校は英語教育ばかり重視して、まともな漢語ができない「偽の中国人」を養成してしまった、との批判に対する彼なりの対応策でもあっただろう。しかしながらここまで中国思想、儒教文化、倫理に妥協してしまうと、キリスト教が本来もっている「博愛」「愛」「一神教」「イエス」などはどのようなものか、いささか不安を覚えさせるものである。林榮洪も本色神学の形成を扱った著書の中で、王治心を文化融和論者の代表として取り上げ、この種のキリスト教知識人は自国文化を偏愛する者であり、彼らの任務はイエスの言論の中から中国の伝統的理論を支持する証拠を見つけ出すこととするものである。だから「キリスト教と中国文化はもはや平等な仲間ではなく、彼らの最終目的は、キリスト教の助けを借りて（中国）文化の価値を保存することである」、と評している⁽⁴⁸⁾。もっともな批判である。

では、外国人宣教師は以上に挙げた本色教会論に対してどのように考えていたのか。一貫して本色化を鼓吹した中華基督教文社に対する態度からその一端を見てみよう。この組織はその革新的な主張のためにJ.モット（John Raleigh Mott, 1865-1955）や*The Chinese Recorder*の編集者であるローリンソン（Frank Joseph Rawlinson, 1871-1937, 中国名は楽靈生）など改革を支持する人たちの支援や賞賛を受けていたが、保守派のマクギリブレイ（Donald MacGillivray, 1862-1931, 広学会の

責任者、中国名は季理斐)がひそかに行った経費支給機関への控訴によって経費の支給を打ち切れ1930年に解散せざるをえなかった⁽⁴⁹⁾。このことにより、表立てでの反対はなかったもののその言論を問題視する宣教師も少なからずいたことがわからう。

そして、上述した教会の本色化理論の形成と相まって、1920年代には本色教会の設立の面でも大きな成果を得た。多くの外国人宣教師が待ち望んだ本色教会である超教派の「中華基督教会」(初代会長は誠静怡)や倪柝聲(Watchman Nee)の「基督教聚會處」(地方教会、小群、召会とも呼ばれる。以下、聚會處と略す)のような中国生まれの自立したネイティブ教会が出現した。これらの教会の成立に関しては別稿で詳しく紹介することにするが、明らかにナショナリズムを底流とする五四新文化運動、反基運動の影響を強く受けての結果であった。1920年代の中国教会の主題であった本色化に限定して言えば、使徒時代の教会に戻ることを目指した聚會處が完全な本色教会を実現させたのとは対照的に、本色教会論を繰り広げたキリスト教知識人指導者の多くが携わった中華基督教会が三自を実現するのは、朝鮮戦争を原因とする外国人の国外退去が決まる1952年まで待たなければならなかった。

おわりに

以上、本稿では新文化運動と1920年代の反基運動の中国教会への影響を明らかにするために、1920年代の中国教会の本色化運動を1910年代までの自立運動との比較の中で考察した。考察に当たっては資料収集の便宜上、主に読み書きのできる知識人が書き残した本色化に関する主張や議論を扱った。その分析作業を通じて、中国の教会を本色化・中国化させ、本色教会を作ることは、1922年のプロテスタント全国大会を起点に中国人キリスト教指導者の間で多く議論され、1910年代までは

教会の自立、とりわけ外国宣教会からの自治、自養が目標であったのに対し、1920年代の本色化運動はこうした従来の自立要求の上に、とりわけ教会と中国文化・思想との融合を訴え、外国色を取り除くことを要求したことが明らかになった。そしてその要求は反基運動(と国民革命)が深化するにつれて強くなっていったのである。その後、本色化運動は1927年に反基運動が蒋介石に停止され、国民革命が終わると次第に色褪せていった。つまり、1920年代の反基運動は教会本色化運動の大きな推進力であり、本色化運動は反基運動をはじめとする一連のナショナリズム運動に対する教会の反応・対応だったのである。

一方、1920年代までの教会の自立についての考察を通じて、本色教会は多くの外国人宣教師と中国人指導者たちの共通した要望であったことが分かった。本論では触れていないが、誠静怡は、教会の本色化だけでなく本色教会をハブに中国社会にキリスト教的精神を発信し続け、最終的に中国社会のキリスト教化、つまり「中華帰主」を実現することをも夢見ていた⁽⁵⁰⁾。しかし、残念なことに積極的に本色化運動を推進した誠をはじめとする多くの中国キリスト教知識人たちが携わった本色教会である中華基督教会は倪の聚会處に比べて三自の実現で大幅に遅れていた。その原因はどこにあるのか。筆者はその原因は中国教会の現実的な需要を無視し、理論に固着した「高文化」の限界と個人の救済よりも社会福音を重視したことにあるのではないかと考える。これについては現代の中国のキリスト教の盛況現象を視野に入れながら、今後の課題として歴史的に着実に考えていきたい。

注

- (1) 王治心『中国基督教史綱』上海古籍出版社、2007年、217頁。

- (2) 主な研究に、同上書、林榮洪『風潮中奮起的中国教会』天道書樓有限公司、1980年、王成勉『文社的盛衰——二〇年代基督教本色化之個案研究』宇宙光傳播中心出版社、1993年、吳国安『中国基督徒对時代的回應（一九一九年至一九二六年）——以《生命月刊》和《真理週刊》為中心的探討』国立台湾大學歷史學研究所修士論文、1998年、林榮洪『中華神學五十年1900-1949』宣道出版社、1998年、劉家峰編『離異与融會：中国基督教与本色教会的興起』上海人民出版社、2005年、趙天恩『中国教会史論文集』財団法人基督教宇宙光全人關懷機構、2006年、吳義雄『開端与發展：華南近代基督教史論集』宇宙光全人關懷、2006年、顧衛民『基督教与近代中国社会』上海人民出版社、2010年、山本澄子『中国キリスト教史研究』（増補改訂版）山川出版社、2006年、徐亦猛「中国におけるキリスト教本色化（土着化）運動：1920年代を中心に」関西学院大學博士論文、2010年、などがある。
- (3) その要因としては、中国人信徒の身分が上昇し、法律上において清國期の「教民」から「国民」になり、彼らの中で国民感情が生まれたこと、宗教信仰の自由の臨時約法への盛り込みによって信教の自由が定められ、教会堂を立てて政府に登録することが許可されたこと、政府機関に勤める中国人信徒の増加により彼らの信徒としての自負心を強めたこと、教会での中国人指導者たちの出現、地方政府の教会自立への支持などを挙げることができる（趙天恩「1911年辛亥革命对中国基督教自立運動的影響」、趙天恩前掲書、144-145。陳春生「基督教对時局最近之概論」『中華基督教会年鑑』第1期、1914年、10頁）。『中華基督教会年鑑』については、以下、『年鑑』と略す。
- (4) 山本澄子、前掲書、36頁。
- (5) 許声炎「閩南長老会的自立自養歴史」『年鑑』第11期（上）、1931年、33頁。
- (6) 陳秋卿「閩南教会合一的經過」『年鑑』第6期、1921年、184-186頁。
- (7) 趙天恩、前掲論文、150頁。
- (8) 柴連復「中国耶蘇教自立会」『年鑑』第11期（上）、1931年、92頁。
- (9) 兪は上海虹口長老會堂の牧師で、いつも教会堂の經費問題のために外国人宣教師と揉めていた。彼は外国人宣教師のところに給与をもらいに行くたびに侮辱を感じたという（張化「中国耶蘇教自立会述評」『史林』

1920年代中国における反キリスト教運動と中国キリスト教会の本色化

1998年第1期, 57頁)。

- (10) 姚民権・羅偉虹『中国基督教簡史』宗教文化出版社, 2000年, 175頁。
- (11) 張化, 前掲論文, 61-62頁。
- (12) 仲偉儀「天津中国基督教会記略」『年鑑』第2期, 1915年, 146-148頁。
- (13) 「華北中華基督教会の近況」『年鑑』第6期, 1921年, 58頁。
- (14) 趙天恩, 前掲論文「1911年辛亥革命对中国基督教自立運動的影響」, 164-165頁。
- (15) 拙稿「中華民国初期の宗教批判について」『言語・地域文化研究』第16号, 2010年, 111-129頁を参考。
- (16) 中華全国基督教協進会『基督教全国大会報告書』(以下、『報告書』と略す) 商務印書館, 1923年, 4-13頁。14頁では参加者の数を1180人としているが, それは参加予定者の数であろう。なお、『基督教全国大会報告書』は台北・中華福音神学院図書館所蔵を利用した。
- (17) 誠静怡「大会会長誠静怡博士開會演詞」『報告書』, 24頁。
- (18) 同上文, 24頁。
- (19) 同上文, 25-26頁。
- (20) 同上文, 25-28頁。
- (21) 「第一股報告書與演説及討論」, 同上書, 81-82頁。
- (22) 「教会将来之工作」同上書, 112頁。
- (23) 同上。
- (24) 「第三股報告書與演説及討論」, 同上書, 174頁。
- (25) 「教会的宣言」, 同上書, 177頁。
- (26) 同上文, 166-169頁。
- (27) 趙紫宸「本色教会之商榷」『青年進歩』第76冊, 1924年10月, 9頁。
- (28) 王治心「中国本色教会的討論」『青年進歩』第79冊, 1925年1月, 13頁。
- (29) 誠静怡「本色教会之商榷」『文社月刊』第1卷第1冊, 1925年10月, 9-10頁。
- (30) 周風「本色教会的討論」『青年進歩』第87冊, 1925年10月, 41頁。その所属機関は不詳。
- (31) 劉樹徳「中国為什麼要創造本色教会?」『真光』第24卷第7号, 1925年11月, 11頁。その所属機関は不詳。
- (32) この過程を, 王治心は東洋果と呼ばれていた落花生がどのように中国

に落花生という名として定着したかを例に形象的に説明している（王治心「本色教会与本色著作」『文社月刊』第1巻第6冊，1926年5月）。

- (33) 誠静怡「中国基督教の性質和状態」『文社月刊』2巻7冊，1927年3月。また，誠静怡著・応元道訳「中国的教会」『青年進歩』52冊，1922年4月，18-19頁（原文は英文で“The Chinese Church of Today”というタイトルでThe Chinese Recorder, Vol.49（1918）に発表されている）でもこれに似たような意見を述べている。
- (34) 趙紫宸「敬致全国中国基督教徒書」『真理与生命』2巻4期，1927年3月，91頁。
- (35) 同上。趙紫宸「中国人的教会意識」『真理与生命』1巻10期，1926年10月。
- (36) 周風，前掲文，46-53頁。
- (37) 同上文，47頁。
- (38) 同上文，47-52頁。
- (39) 王治心「本色教会応創何種節期適合中国固有的風俗」『文社月刊』1巻6冊，1926年5月，21-34頁。
- (40) 王治心「本色教會的婚葬礼芻議」『文社月刊』1巻6冊，1926年5月，69-84頁。
- (41) 誠静怡，前掲「本色教会之商榷」，12頁。
- (42) 同上文，12-13頁。
- (43) 趙紫宸「中国教會的強点与弱点」，前掲『報告書』，87頁。それは大会参加者たちの共通認識でもあった。
- (44) 王治心「本色教會的討論」，15頁。
- (45) 同上。
- (46) 劉樹德，前掲文，14-15頁。
- (47) 王治心「本色教会与本色著作」『文社月刊』1巻6冊，1926年5月，1-17頁。
- (48) 林榮洪『風潮中奮起的中国教会』天道書樓有限公司，1980年，108頁。
- (49) 王成勉『文社の盛衰一一二〇年代基督教本色化之個案研究』宇宙光傳播中心出版社，1993年，146-149頁。
- (50) 誠静怡，前掲「中国的教会」，1頁。趙天恩「新文化運動与中国本色教会理念之發展」，前掲書，197頁。